

個に応じたキャリア教育を実現するための ファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅢ

—— 職業人との関わりを通じた成長 ——

A Trial Study of Faculty Development to Provide All Types of Students With Vocational Education Geared to Their Abilities Ⅲ

玉田和恵* 神部順子** 八木徹***
海老澤邦江**** 波多野和彦***** 古里靖彦*****

要 約

本研究では、真に就職をするための力を育成するために、従来のキャリア教育プログラムに加えて、学生が「自分たちは社会から何を求められているか」ということを痛切に認識するための実践を検討することとした。社会の第一線で活躍する方々の話を聴いて考えた「職業人講話」、実際に長崎に赴き市長を始め自治体を動かしている方々から話を聴いて、平和や生き方について考えた「長崎市長との懇談」、世界的視野に立って物事を考えた「ニューヨーク企業訪問」、自分たちが作品を作り上げるために現地の方々に取材をした「東海道五十三次」。これらの活動を通して学生は、「日本の置かれている状況から求められるもの」「人としての生き方に関して求められるもの」について多くのことを修得した。

1. はじめに

現在、大学生の就職内定率は就職氷河期以下の最悪の状況であるということが各種メディアで騒がれている。図1に示すように2004年（平成15年）に大学学部卒の就職率が55.1%と最悪であったが、その後回復の兆しにあった。しかし、2010年度には、就職率が最悪の状況になることが予測されている。

若者の就業については、若者側の問題、教育の問題、産業界の問題、社会全体の問題と、さまざまな要因が複合的に絡み合っている。現在の若者たちは、学校から社会・職業への移行が円滑に行われないという困難に直面しているのである。例えば、大学生の就職率以外にも、15～24歳の完全失業率が約7%、非正規雇用率が約30%、若年無業者が約60万人、新規学卒者の3年以内離職が大学等卒で4割という状況である（厚生労働省2005）。

キャリア教育の観点から現在の状況を鑑みると、大学入学以前に職業を意識したことがない大学1年生が約3割いるという調査結果もある（文部科学省2009）。高等教育機関へ進学する者の割合が増加していることに伴い、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することなく、進

2011年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科准教授 教育工学

** 江戸川大学 情報文化学科准教授 情報科学

*** 江戸川大学 情報文化学科専任講師 情報化学

**** 江戸川大学 情報文化学科教授 イギリス語

***** 江戸川大学 情報文化学科教授 教育工学

***** 江戸川大学 情報文化学科教授 e-ビジネス

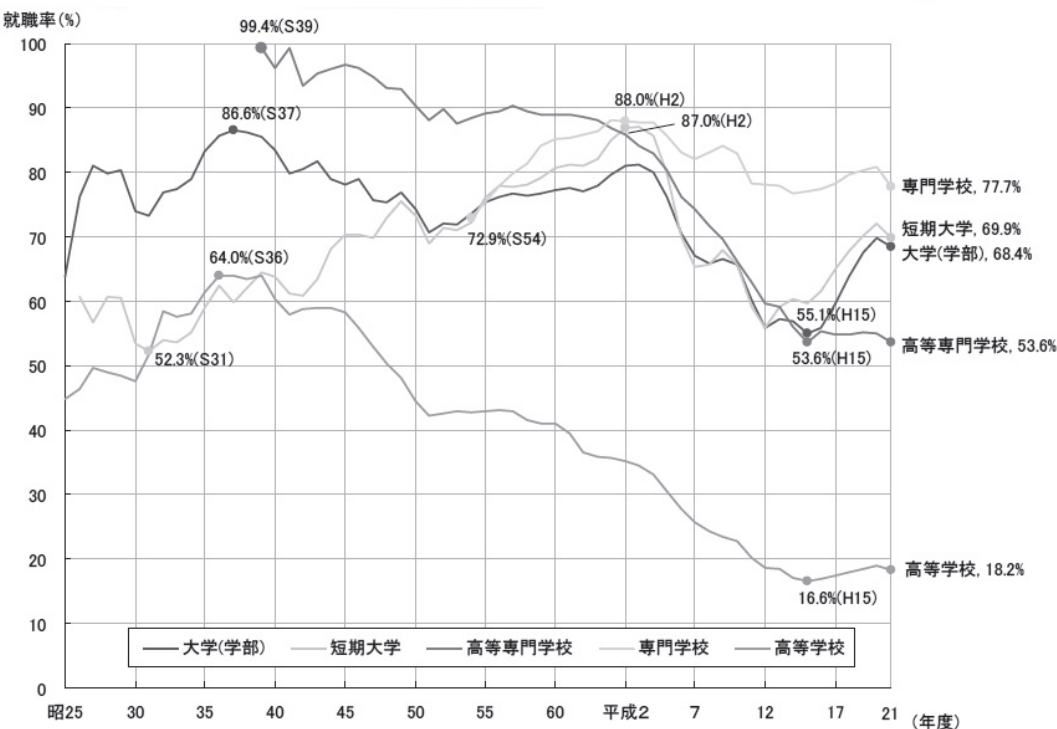


図 1. 卒業者の就職率（文部科学省「学校基本調査」2009 年）

路意識や目的意識が希薄なままとりあえず大学に進学したりする者が増加しているようである。就職に対する進路意識や目的意識の希薄化が大きな問題となっている。

一方、大学生の目的意識の低下と共に、大学生自身が、社会から自分たちが何を求められているかということに対する認識不足も見られる。表 1

には、新規採用にあたって企業が何を重視するかということが校種別にまとめられているが、大学卒に求めるものの第 1 位は「熱意・意欲（77.2%）」が群を抜いている。大学生が、就職活動に当たって自己 PR をする場合半数以上の学生が自分の「協調性」を訴えている。企業が求めるものの第 3 位であり第 1 位の「熱意・意欲」から 30 ポイ

表 1. 新規採用にあたって企業が重視する点

	大学卒		大学院卒		短期大学卒		専門学校卒	
第 1 位	熱意・意欲	77.2%	熱意・意欲	70.5%	熱意・意欲	78.6%	熱意・意欲	77.0%
第 2 位	行動力・実行力	49.5%	行動力・実行力	45.3%	協調性	59.3%	協調性	59.3%
第 3 位	協調性	43.4%	協調性	45.3%	行動力・実行力	38.6%	行動力・実行力	37.8%
第 4 位	論理的思考力	21.7%	専門知識・研究内容	28.0%	表現力・プレゼンテーション能力	17.2%	専門知識・研究内容	23.0%
第 5 位	問題解決力	18.1%	論理的思考力	23.6%	常に新しい知識・能力を学ぼうとする力	16.6%	表現力・プレゼンテーション能力	17.0%

（社）経済同友会「企業の採用と教育に関するアンケート調査」2008 年

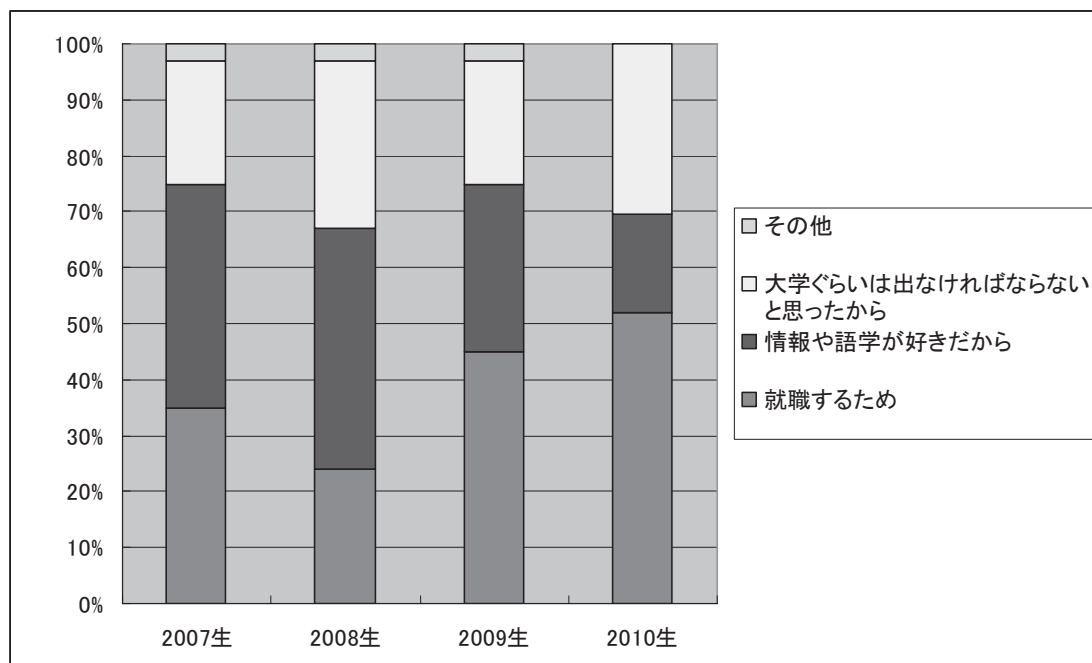


図2. 江戸川大学 情報文化学科への入学動機

ント以上の差がある項目を一番重要だと現在の学生たちは考えているのである。このように社会から何を求められているかということに対する認識のなさも就職率を下げる要因になっていると考えられる。

本研究では、これまでにファカルティ・ディベロップメントの取り組みとして、社会人として生き抜くことができる人間力を育成するという観点から、個々の学生に応じた指導を実践するためのキャリア教育カリキュラムを構築して、実践している（玉田ら 2009 玉田ら 2010）。これまで「社会人になるための知識・技術・態度」「人への感謝の気持ち」「人としての生き方」を中心にさまざまな活動をしてきているが、さらに差し迫った問題として社会が自分に何を求めているかということを認識するプログラムが必要である。

本研究では、真に就職をするための力を育成するため、従来のキャリアプログラムに加えて、学生が「自分たちは社会から何を求められているか」ということを痛切に認識するための実践について

検討することを目的とする。

2. 学生の入学動機

具体的に今年度の取組について論ずる前に、情報文化学科に入学してきた学生が、どのような目的で入学しているかという意識の推移について概観する。

入学時のアンケート調査の中で「なぜ、江戸川大学情報文化学科に入学したのか」という問いに対して、2007年度生、2008年度生までは、「情報や語学が好きだから」という回答が最も多かった。しかし、2009年度生からは、「就職するため」という項目が最も多くなっている（図2）。

この変化の原因を、自由記述などから推測すると、「ニートやフリーターになってはいけない」ということは高校までのさまざまな教育の中で学習しているようである。また、世の中に対する認識として、「若者の就職が厳しい」ということは

理解しているようである。そのため、本学科に入学してくる学生は、大学で漠然と何かを勉強したいという意識ではなく、就職をするために大学に入学するのだという意識は持っているようである。しかし、就職をしたいという意識はあるが、具体的に自分が何をしなければならないのか、社会は自分に何を求めているのかということは全く理解していないようである。

3. 職業人講話

これまでの取組でも、学生の人間性を高め、社会に対す認識を深め、折れない心を育成するために、社会の第一線で活躍している方々の生き様に直接触れるための職業人を招聘した特別講演会を実施してきた。しかし、今年度は、「社会が学生に対して何を求めているのか」ということを痛感させ、これまでの意識を変革させ「これから自分たちはどう生きていくべきか」ということを真剣に考えさせるための活動として職業人講話を位置づけた。

2010年12月までに特別講演をしてくださったのは表2の方々である。

3.1 「グローバリゼーションにいかに対応するか」

2010年4月23日に、千葉滋胤氏（千葉県商工会議所連合会会長）が、「グローバリゼーションにいかに対応するか」という題目で講演をしてく

表2. 職業人講話講師

千葉県商工会議所連合会 株式会社ケーブルネットワーク千葉 代表取締役会長	会長 千葉滋胤氏
株式会社フジスタッフ 代表取締役会長	増山律子氏
元国土交通省 事務次官	安富正文氏
丸紅（北京）商業貿易公司 金融物流信息部部长	菅 隆之氏
NHKメディアテクノロジー 取締役	吉中昭夫氏
文化放送 社長	三木明博氏



写真1 千葉滋胤氏
（千葉県商工会議所連合会会長）

ださった。内容は、これからの若者は日本だけの枠組みに捉われず、国際的視野にたって、問題解決をしていかなければならないというものであった。

まず、国際的に日本の置かれている状況を理解させるために、世界各国の状況を紐解きながら詳しく解説してくださった。実際にビジネス界のトップとして長年日本経済を牽引している方から

表3. 千葉滋胤氏の講演内容

<ul style="list-style-type: none"> ・現代日本の置かれている状況について ・各国の経済状況について <ul style="list-style-type: none"> ▶ BRICS ▶ PIGS ▶ 日米関係（基地問題） ・アメリカから日本がどう見られているか ・先進国の疲弊と発展途上国の進展 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 独仏英米日の GDP 推移 ▶ BRICS の飛躍的経済発展 ・パラダイムの変換が必要 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新しいステージだから新しい考え方で ▶ ビジネスモデルを変えていかなければならない ▶ お手本はない ・世界各国の無気力感 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 貧困・民族格差 ・学生へのメッセージ（どう解決するか） <ul style="list-style-type: none"> ▶ 仮説を立てて考える <ul style="list-style-type: none"> ◇ 各国独自の問題 ◇ 世界共通の問題 ▶ 問題を図で表現してみる ▶ 自分なりにテーマを数量化して考える ▶ ワールドワイドなやり取りをするため英語は必須 ▶ 一般教養を身につける
--

「日本の状況」、あるいは「若者の生きるべき道」についての示唆をいただくことは、学生の心を強く揺さぶるものであった。

講演後の学生からの感想には、「国際的な視野にたって物事を考えなければならない」ということと、「今、日本が大変な状況に置かれており、これまでの社会にはお手本がない、自分たちが世の中を切り開いていかなければならない」ということを認識したという記述が多く見られた。教師がいつも口にして「英語と一般常識を身につけなければならない」という言葉も、世の中の第一線で活躍されている方から聞くとは真に迫るようであった。

3.2 「あなたの始めは小さいけれど、 末は甚だ大なり」

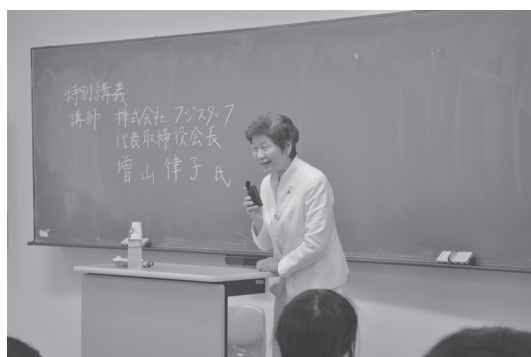


写真 2 増山律子氏
(株式会社フジスタッフ代表取締役会長)

表 4. 増山律子氏の講演内容

- ・仕事を始めた経緯
- ・会長のモットー
 - ▶ 「人にして欲しいことを人にしてあげなさい」
- ・会長自身の半生
- ・自分が守ってきたこと
 - ▶ 人を悪く思わない
 - ▶ 人の噂話をしない
 - ▶ 試練から目をそむけない
 - ◇ 厳しい言葉に耳を傾ける
 - ▶ 困難に打ち勝つ
 - ▶ プラス思考を訓練
- ・学生へのメッセージ
 - ▶ 「あなたの始めは小さいけれど、末は甚だ大なり」

2010年6月7日には、増山律子氏（株式会社フジスタッフ代表取締役会長）が、ご自身の経験を基に「人としてどう生きていくか」ということをテーマに講演してくださった。女性の講師に講演をいただくのは初めてで、女性ならではの視点から、生き方についてのお話をいただいた。

「専業主婦であったご自身がなぜ今の仕事をされるようになったのか」、「子育てで大切にしてきたことは何か」、「生きていくために自分が守ってきたことは何か」ということを切々と柔らかく語った下さり、学生は優しい母の言葉に包まれるように話に聴き入っていた。

講演後の学生の感想には、「人のことを悪く言うてはいけない」「人にして欲しいことを自分もしてあげなければならない」「試練から目をそむけてはいけない」ということに対する記述が多く、人として生きていくための示唆を多く受け取ったことがうかがえた。厳しいことを言ってくれる人は、自分のことを真剣に考えてくれている人なのだということが認識できたようである。

3.3 「私の役人人生 デジタルライフ」

2010年6月18日、安富正文氏（元国土交通省事務次官 東京地下鉄株式会社顧問）に「私の役人人生 デジタルライフ」という題目で講演をし

表 5. 安富正文氏の講演内容

- ・役人とはどのようなものか
 - ▶ 民間との違い
- ・国土交通省事務次官に至る道のり
- ・仕事の履歴
 - ▶ 役人時代の仕事
 - ▶ 国際レジャー博覧会
 - ▶ 民間での経験
- ・どういう視点で考えるか
 - ▶ 効率性、公平性、公正性、安全性
 - ▶ 受給調整
- ・学生へのメッセージ
 - ▶ モチベーションがなければダメ
 - ▶ 評価されるポイントが変わる
 - ◇ 20代：仕事への情熱
 - ◇ 30代：専門性
 - ◇ 40代：管理能力
 - ◇ 50代：人柄
 - ▶ 「だめでもともと」



写真3 安富正文氏（元国土交通省事務次官
東京地下鉄株式会社顧問）

ていただいた。ご自身の仕事の経歴を紹介しながら、職業人として何に気をつけ、どういう視点で考えながら仕事をしていかなければならないかという話を話して下さった。

講演後の学生の感想には、「モチベーションを持たなければならないこと」、また、「モチベーションがあることを人にも見せなければならないことがよく分かった」という記述が多かった。また、「だめでもともと」と考えてさまざまなことに挑戦することの大切さ、「年代に応じて評価されるポイントが変わることを初めて知った」「社会人になったらそれを意識して働きたい」という記述が多く見られた。

3.4 「ビジネスの現場から見る中国」



写真4 菅 隆之氏（丸紅（北京）
商業貿易公司 金融物流情報部部長）

表6. 菅 隆之氏の講演内容

- ・中国のあらまし
 - ▶ 料理 地理 人口 民族 気候
 - ▶ ホームページは登録許可制
- ・経済動向
 - ▶ リーマンショック
- ・輸出動向
 - ▶ 加工貿易中心 労働争議
 - ▶ 人民元の切り上げ問題
- ・市場動向
 - ▶ 金融市場 不動産バブル
- ・政策対応
 - ▶ 地方政府の隠れた債務
- ・人口労働問題
 - ▶ 生産人口増加
 - ▶ 日本と同じような若者問題
 - ◇ 自立できない フリーター
- ・都市化と輸送インフラ
- ・経済動向
 - ▶ リーマンショックへの対応
 - ▶ 世界に占める中国の割合
 - ▶ 公共投資
- ・学生へのメッセージ
 - ▶ 世界に視野を広げて就職を考える
 - ▶ 明るくて元気で素直な学生が一番良い
 - ▶ 何を勉強したかではなく、何を学んでどのように考えや行動が変わったかが大切

2010年10月5日、菅 隆之氏（丸紅（北京）商業貿易公司 金融物流情報部部長）に「ビジネスの現場から見る中国」という題目で、現在の中国の様子、中国の経済発展とその実情、日本人学生が何をしなければならないかということについて講演をしていただいた。

講演後の学生の感想には、「自分たちは日本での就職しか考えていなかったが。世界を視野に入れて就職活動を考えていかなければならないのだということに気づいた」という記述が最も多かった。また、どのような学生にならなければならないかという点について「明るく元気で素直な」ことを心がけたいと大半の学生が感じたようである。

3.5 「放送・IT 産業の行方」

2010年10月29日、吉中昭夫氏（㈱NHKメディアテクノロジー取締役）に「放送・IT 産業の行方」という題目で、現在の放送業界の置かれている状況、IT 産業と放送業界の融合について、講演していただいた。



写真5 吉中昭夫氏

(株)NHK メディアテクノロジー取締役

表7. 吉中昭夫氏の講演内容

- ・放送の基本
 - ▶ 法律・制度 経済・産業・経営 放送技術
- ・IT が先導する放送と通信の融合
 - ▶ 番組製作過程のIT 化
 - ▶ インターネットによる映像配信
 - ▶ 情報通信法の目指すもの
- ・IT 化の行方（新時代を制するものは？）
 - ▶ 収益の源泉移動
 - ▶ コンテンツ制作力の衰退、質の低下
 - ▶ 民法業績と番組制作費
- ・(株)NHK メディアテクノロジーについて
- ・職業としての放送人・IT 技術者
- ・クラウドコンピューティングとは
 - ▶ 巨大データセンターの省エネ化・クリーン化
 - ▶ グローバル展開

講演後の感想では、大半の学生が「テレビの置かれている厳しい状況について驚いた」と述べている。このような状況を打開するためにはどうすればよいのかという意見や、今後自分がどのようにテレビを視聴するかということが多く記述された。

3.6 「メディアからみる日本の形」

2010 年 11 月 26 日、三木明博氏（文化放送社長）に「メディアからみる日本の形」という題目で、日本の置かれている状況、メディアが地殻変動を起こし今後どのような方向に進むか、このような状況で若者は何を考え、どう努力していかなければならないかということについて講演していただいた。

表8. 三木明博氏の講演内容

- ・先行きの見えない日本（混迷の時代）
 - ▶ BRICS
- ・メディアの地殻変動
 - ▶ コンテンツ プラットフォーム
 - ▶ インフラ 端末
 - ▶ 垂直統合 水平統合
 - ▶ ネットメディア × 既存メディア
 - ▶ ビジネスモデルの変化
- ・学生に伝えたいこと
 - ▶ 準備力
 - ◇ 10 年後の自分を思い浮かべてみよう
 - ▶ 歴史に学ぶ
 - ▶ 仲間力の時代
 - ▶ 否定から入らない
 - ◇ ダメだでは何も始まらない
 - ▶ 未来と自分は変えられる

講演後の学生からの感想には、「未来と自分を変えられる」という言葉に強く共感し、「何事も



写真6 三木明博氏（文化放送社長）

写真7 職業人講話を聴いた後に
感想を書いている様子

否定から入ってはいけない」ということを意識した記述が多く見られた。学生は、社会の第一線で活躍している方から送られたメッセージを心に刻み込んだようである。

4. 長崎市長との懇談

社会で活躍する職業人との触れ合う目的と、人としてどう生きていくべきかということ深く考えさせるという目的で、毎年8月に第2次大戦時に原爆が投下された長崎への研修旅行を実施している。昨年度より田上長崎市長に時間をとっていただき、懇談会を実施している。

今年度は、田上市長が市民との懇談として実施している「ちゃんぽんミーティングの番外編」として、龍馬伝説カレーに舌鼓を打ちながら懇談が行われた（記事1）。

長崎市からは、田上富久市長、浦瀬徹文化観光部部長、股張一男文化観光部さるく観光課課長、岩崎相文化観光部さるく観光課担当の方々が参加してくださった。

懇談の冒頭で、田上市長からは「現場で覚える、体を使って覚える感覚を身につけるということの大切さを学んで欲しい、実際に現場でしか学べないコツが何かあるはずです」というお話をいただき、龍馬カレーを食べた後に懇談が始まった。

懇談は、「市長の考える平和」「市長が世界に発信したいことは何か」という平和や核廃絶に関する内容から、「市長個人として何を大切に生きて

いるか」という個人の生き様に関するものまで多岐に渡る内容であった。

田上市長から、「平和とは色々な人の違う意見を受け入れることが一番大事だと思う」「世界に向かって、人間にとって核兵器は必要ないということを明確に伝え、歴史的にいろんな国の人々がさまざまな交流をした長崎の多様性を発信したい」という平和に対する責任・役割に関するお話をいただいた。また、市長が個人的に心がけているものの見方や考え方に関するお話をうかがうことができた。「物事を見る時に1つは多面的にみるということ、いろんな角度から見るという事。それから、2つ目は長い目でみる。短期的に見る目と長い目で見ると結果が違ったりするから長い目で見る。それから、3つ目は枝葉末節ではなく本質が何なのか見るという事。というのが物を見るときに大事な3つの判断のコツだと思って、心がけている」という内容であった。

その後、市役所から参加された方々から、それぞれの立場で今何をやっているか、若者に何を望むかということについての意見をいただき、質疑応答を行った。

この懇談を通して学生は、今という時代を生きている自分たちが持つべき平和についての責任を深く心に刻んだようである。後日提出されたレポートには、平和に関する責任と、人間として多様なものの見方をすることの大切さについての記述が多く見られた。実際に、長崎という現場に足を運び、さまざまなものを見て、市という大きな組織を運営している市長から直接話をうかがうことができ、学生は見識を広げ、今後生きていくために何をしていかなければならないかということ真剣に考えたようである。

5. ニューヨーク企業訪問

世界的視野に立って物事を考えることが、現代社会を生きる若者には求められている。日本だけの常識や価値観だけでは、生き残れない時代がもうすぐやってくる。そこで、日本国内だけではなく広い視野に立って現場に足を運び、人としての



写真8 田上長崎市長との懇談

問した。いずれの企業でも、社会人として働くとはどういうことかということに加えて、アメリカで日本人が活躍することの苦労ややり甲斐、世界を相手に仕事をするものの醍醐味が熱く語られた。

お話をしてくださった方々が、所属する企業のために何ができるかを常に考え、日本のためにどんな貢献ができるかということ念頭に置いて仕事をしていらっしゃる姿を垣間見て、日本国内で自分の周りのことしか考えていなかった学生たちの意識は少し変わったようである。

また、NHK ニューヨーク支局で支局長や駐在記者の方から、世界で起こっている事件を正確に、素早く伝えたいということを常に考えながら生活しているということを伺って、自分の職業に対する責任感や信念を持つことの大切さについて感銘

を受けたようである。

日本を離れて、ニューヨークで世界を相手に仕事をしている方々の熱い想いをうかがうことができ、学生たちは、世界的視野に立っているいろいろな方向から物事を考えられるようになったようである。

6. 東海道五十三次

江戸川大学の教育理念は、「人間としての優しさに満ち、普遍的な教養と時代が求める専門性により社会貢献できる人材の育成」を目指す「人間陶冶（とうや）」である。一方、情報文化学科には、進路として Web デザインや広告デザインなどネットワークや広告媒体などさまざまなメディアで



写真9 メトロポリタン劇場前



写真11 丸紅米国での懇談



写真10 ジャパン TV での懇談



写真12 NHK ニューヨーク支局での懇談

の表現力を必要とする職業を目指す学生が多く入学する。

そのため人間としての普遍的な教養と感性や表現力を育成することが大きな教育目標となっている。そこで、これまで「百人一首（2008年）」「源氏物語（2009年）」などを、教養を高めることと、

デジタルによる表現力を育成するための課題として行ってきた。今年度は、これらの流れの中で「東海道五十三次」のデジタル化に取り組んでいる（図4）。

今回のテーマは、

・安藤広重が描いていると東海道五十三次の絵



図3 東海道五十三次（丸子）の模写



図5 東海道五十三次（鳴海）の模写



図4 東海道五十三次表紙



図6 各イメージのページ

を模写してデジタル化する(図3,図5)

・絵が描かれた場所の現在の情景を撮影する(図6)

・その場所の現在の様子を紹介するための取材をして、文章にまとめる(図6)

という高度な内容となっている。有志の学生と教員がそれぞれの場所を分担し、絵を描き取材に赴いた。

これらの活動によって学生は、古典作品に触れて、作品を創り上げるという側面と、実際に現地で取材をするため、そこで生活をしているさまざまな方々と触れ合う機会を持つという複合的な体験をした。東海道五十三次は東京の日本橋から京都までの長い道のりのため、遠方の担当になった学生や教員にとっては非常に困難な課題であった。しかし、これらの困難な課題に取り組むことによって、学生は人間としての教養と、「自分たちは社会から何を求められているか」ということを学び取ったようである。これらの活動については、社会からも強い関心を集めており、2010年12月13日にNHK首都圏ニュースで取り上げられた。

7. まとめと今後の課題

本研究では、真に就職をするための力を育成するために、従来のキャリア教育プログラムに加えて、学生に「自分たちは社会から何を求められているか」ということを痛切に認識させるための実践を検討した。

2009年までの取組では

- ・礼儀の大切さ
- ・目標に向かって向上心を持って取り組むことの大切さ
- ・誠意には誠意でこたえる
- ・素直な気持ちで生きる
- ・責任をもって様々なことに挑戦する

ということを学んできた。今回は、職業人との触れ合いを中心に「自分たちが社会から何を求められているか」ということを目的としたさまざまな取組の中で多くのことを学んだようである。

社会の第一線で仕事をしている方々が、自らの経験を基に学生に伝えてくださったメッセージは、日本の置かれている状況など共通の内容から、個々の方々の専門分野に関するもの、明日の社会を担う若者へのメッセージなどさまざまであった。しかし、学生はいただいたメッセージを深く心に刻んだようである。

社会の第一線で活躍する方々の話を聴いて考える「職業人講話」、実際に長崎に赴き市長を始めとする自治体を動かしている方々から直接話を聴いて考えた「長崎市長との懇談」、世界的視野に立って物事を考えた「ニューヨーク企業訪問」、自分たちが作品を作り上げるために現地の方々に取材をした「東海道五十三次」。これらの活動を通して学生は、「自分たちが社会から何を求められているか」ということをある程度学び取ったと考えられる。

具体的には以下のようなことを修得した。

「日本の置かれた現状から求められるもの」

- ・国際的な視野にたつて物事を考えなければならない(世界を視野に入れて就職活動を考えていかなければならない)
- ・英語と一般常識を身につけなければならない
- ・日本は大変な状況に置かれており、これまでの社会にはお手本がないから、自分たちが世の中を切り開いていかなければならない
- 「人としての生き方に関して求められるもの」
- ・明るく元気で素直なことを心がける
- ・人にして欲しいことを自分もしてあげなければならない
- ・試練から目をそむけてはならない
- ・未来と自分は変えられる
- ・何事も否定から入ってはいけない
- ・モチベーションを高めて、それを表現できなければならない
- ・平和に対して責任がある
- ・人間として多様なものの見方をすることが大切である

学生は、本研究により多くの職業人の方々からさまざまなお話をうかがい、上記のことを学ぶことができた。これを今後の活動に結び付けられる

よう側面から支援をしていく必要がある。また、今回の課題では、自分の経験や相手への感謝の気持ちを表現するための「表現力のなさ」「国語力のなさ」が目についた。今後は、これらの課題を解決するための取組が必要となる。

謝辞

本研究にあたって、さまざまな方々の協力をいただいた。特別講演会にご協力くださった皆さま・長崎の皆さま、活動を支えてくださった江戸川大学教職員の皆さまに心から感謝の意を表します。

参考文献

- 総務省統計局「労働力調査」
<http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/zuhyou/05401.xls> (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 総務省統計局「労働力調査特別調査」
<http://www.stat.go.jp/data/routoku/index.htm> (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 総務省統計局「就業構造基本調査」
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001013823&cycode=0> (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 厚生労働省「新規学校卒業就職者の就職 離職状況調査結果」(2005 年)
- http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h18/10_pdf/01_honpen/pdf/06ksha0101.pdf (参照日 2010 年 11 月 30 日)
- 中央教育審議会(2002) 中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203/020203a.htm#06 (参照日 2009 年 11 月 10 日)
- 大学審議会(1991) 大学審議会答申「大学教育の改革について」, 文部省
- 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会 中間報告書」<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf> (参照日 2009 年 11 月 10 日)
- 国立教育政策研究所(2007)「キャリア教育への招待」, 東洋館出版者, 東京
- 私立大学情報教育協会「大学における教養教育」大学教員の授業改善白書http://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2324/3_1.html (参照日 2009 年 11 月 10 日)
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・古里靖彦(2009)「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み」江戸川大学紀要「情報と社会」, 19, 293-303
- 玉田和恵・神部順子・海老澤邦江・八木徹・波多野和彦・古里靖彦(2010)「個に応じたキャリア教育を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みⅡー人間力を育成するための教養教育を目指してー」江戸川大学紀要「情報と社会」, 20, 203-212